

奥能登国際芸術祭

珠洲



SUZU.2023

奥能登国際芸術祭 2023

企画発表会資料

# 目次

開催概要	01
奥能登国際芸術祭の特徴	02
10のエリア	03
参加アーティスト	05
パフォーミングアーツ	07
チケット情報	08
オフィシャルツアー／	
インフォメーションセンター／アクセス	09
- 作品プラン -	
大谷エリア	11
日置エリア	16
三崎エリア	17
蛸島エリア	19
正院エリア	21
直エリア	22
飯田エリア	23
上戸エリア	25
宝立エリア	27
若山エリア	29
広域展開	30
お問い合わせ	

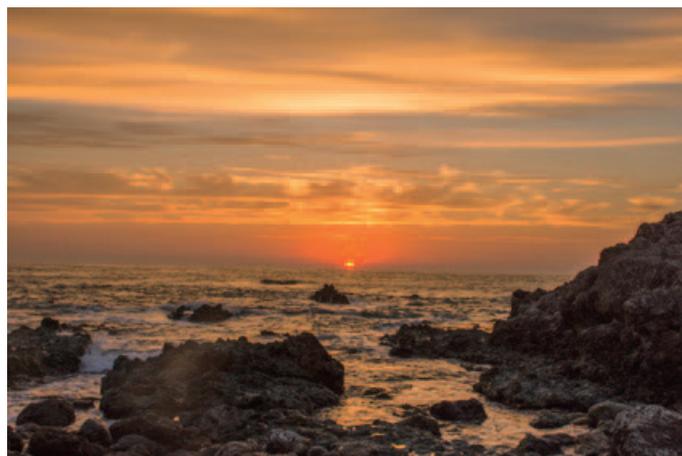
## 開催概要

会期	2023年9月23日（土） - 11月12日（日） 毎週木曜休館日
会場	石川県珠洲市全域（247.20km <sup>2</sup> ）
参加アーティスト	14の国と地域から59組
主催	奥能登国際芸術祭実行委員会
実行委員長	泉谷満寿裕（珠洲市長）
総合ディレクター	北川フラム（アートディレクター）
特別協力	北國新聞社
後援	北陸放送／テレビ金沢／エフエム石川／ラジオかなざわ／ラジオこまつ／ラジオななお

## 奥能登国際芸術祭の特徴

### ◆岬めぐり

奥能登・珠洲は、能登半島の最先端に位置し、日本海に囲まれた農山漁村です。荒々しい岩礁海岸の外海と、波穏やかな砂浜が広がるの内海という2つの海をもち、美しい岬が里山里海によって形成されています。



### ◆廃線をたどる

1964年に開通し、2005年に廃線となった「のと鉄道」能登線。珠洲市内を走っていた長さは約12kmで、当時の面影を残したまま線路敷きやトンネル跡など、現在8つの駅跡が残されています。



### ◆祭り

秋には五穀豊穡を願い祝う「秋祭り」が行われます。キリコや曳山が巡行し、集落や町内を囃子に合わせて日中から夜にかけて練り歩く姿は幻想的です。家人が客人をもてなす「ヨバレ」という独特な風習も見ることができます。



### ◆食

世界農業遺産にも認定された「能登の里山里海」の最先端に位置する珠洲は、まさに食材の宝庫です。季節とともに旬が移り変わり、能登杜氏などの独特な発酵文化も育まれてきました。



## 10のエリア

珠洲は市政施行前の3町6村（西海、三崎、蛸島、正院、直、飯田、上戸、宝立、若山）を基本に、外浦一帯に広がっていた旧西海村を大谷と日置に分けた10のエリアがあります。それぞれ独自の祭りや文化、歴史を持っており、現在も公民館活動が10のエリアそれぞれで盛んにおこなわれています。各エリアの特徴を楽しみながら、芸術祭をお楽しみください。

### ◆大谷

耕作面積が少なく、日本海の荒波に侵食された岩礁が多く存在する外浦に位置する大谷エリア。強い海風が吹く冬の日には、波が白い泡になって、雪のように舞う「波の花」や、滝が重力に逆らい空に向かって上る「垂水の滝」が見られます。また、日本で唯一の、揚げ浜式製塩が500年の間途切れることなく続き、角花家をはじめ複数の製塩業者が点在しています。道の駅塩田村に塩の資料館を併設するなど、製塩が特徴の一つとなっています。



### ◆日置

能登半島の最先端に位置し、白亜の灯台「緑剛埼灯台」があり、日の出・日の入りが見られることでも有名な日置エリア。灯台のふもとにある道の駅狼煙では、地元住民が再興した大浜大豆を使った特産品が販売されています。灯台から大谷エリアの椿展望台へと続く全長約10kmの岬遊歩道は日置エリアをほぼ横断しており、最果ての景観を楽しめます。山間部では炭づくりを核とした里山の管理が進められています。



### ◆三崎

日本海の守護神とされる「須須神社」が鎮座する三崎エリア。漁師や船乗りの信仰を集める三崎エリアでは、現在でも貴重な舟小屋群が残されています。須須神社の祭礼である寺家の秋祭りでは、高さ16.5mにもなる大型のキリコが夜を徹して町内を巡行します。また、三崎エリアの海岸では、かつてこの地域で栄えた瓦産業の名残として、波に削られて角が丸くなった瓦の破片も多く見つかります。



### ◆蛸島

石川県屈指の漁港を持つ漁師町の蛸島エリア。風情を残す白壁と下見板張りのまち並みは、1996年にいしかわ景観賞を受賞しています。高倉彦神社の祭礼である蛸島の秋祭りでは、豪華絢爛な総漆塗りのキリコが巡行され、県指定無形民俗文化財指定の「早船狂言」が上演されます。珠洲焼に関する施設も多く集まっており、県内有数の透明度を誇る遠浅の海が続く鉢ヶ崎海水浴場は、日本の渚・百選に選定されています。



### ◆正院

古代珠洲の中心地であった正院エリア。冬になると白鳥が飛来し、かつて海の底にいたことがよくわかる「平床貝層」や、上杉謙信が家臣を在城させた「正院川尻城跡」があります。須受八幡宮には、能舞台と28の能面が残っており、正院の秋祭りでは、花模様のドテラ姿に鈴をつけ、化粧前掛けをした若者たちが、威勢のいい掛け声で、シャンガと呼ばれる毛やりを振り回しながら町中を練り歩く「奴振り」が行われます。



## ◆直

珠洲の文教地区である直エリア。観光案内所が併設される道の駅すずなりは、市のコミュニティバスや珠洲特急などの交通ターミナル機能も有しており、多くの人に利用されています。2019年には、子どもセンター「すずキッズランド」を併設した「珠洲市民図書館」がオープン。近隣には「珠洲市総合病院」「石川県立飯田高等学校」「珠洲市立緑丘中学校」があります。また、2023年には、市内5カ所の保育所が統合した「珠洲市立つばき保育園」がオープンしました。



## ◆飯田

海と山を結ぶ道の分岐点となっている飯田エリア。かつて飯田港には、多くの物資が運搬され、商売の町として賑わいを見せました。その名残として、今でも飯田の夜の町には多くの飲み屋が残っています。江戸時代から続き、7月に行われる春日神社の祭礼「飯田町燈籠山祭り」は、祭りの盛んな珠洲の中でもとりわけユニークで、「燈籠山」といわれる巨大な山車を曳きます。



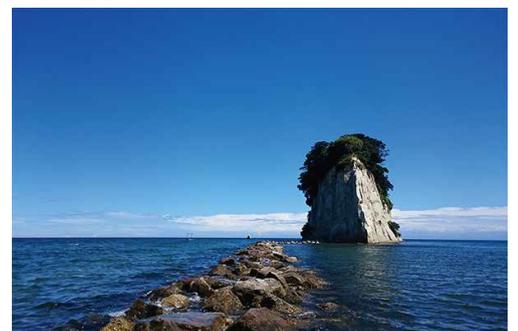
## ◆上戸

かつて塩田が並んだ上戸エリア。困窮した能登の製塩業者を救うべく対策を練った医師・藻寄行蔵を顕彰し、製塩業者らが中心となって能登塩田再興碑がこの地に建てられました。真言宗の古刹・高照寺には、石川県の天然記念物に指定されている樹齢900年の老杉があります。杉の枝が地面を這うようにして、逆さに垂れていることから「倒さスギ」（別名：能登の一本杉）と呼ばれています。



## ◆宝立

数々の弘法大師の伝説が残る宝立エリア。弘法大師が布教のために、佐渡から能登へと渡る際に見つけたことに由来して名づけられたとされる「見附島」。別名「軍艦島」とも呼ばれており、夜になるとライトアップもされています。また、8月の宝立七タキリコ祭りでは、担ぐキリコとしては最大級の高さ14mのキリコを約100人で担いで巡行します。海中で乱舞するキリコと、その真後ろにあがる花火が見所の迫力ある祭りとなっています。



## ◆若山

珠洲市内で唯一海がない若山エリア。稲の病害虫を松明の火で追い払いその年の豊作を祈願する「虫送り」や、田の神様を招いて一年の収穫の感謝と、翌年の豊作を祈願する農耕儀礼「あえのこと」などが今も行われています。また、山間部はゲンジボタルの群生地として、無数のホタルが美しい里山の原風景を舞う姿が楽しめる場所として知られています。



## 参加アーティスト（2023年5月末時点）

エリア	新作	アーティスト名	出身地域／活動地域	展示
大谷		塩田千春	日本／ドイツ	屋内
		南条嘉毅	日本	屋内
		OBI	日本	屋内
		大川友希	日本	屋内
		橋本雅也	日本	屋内
		竹中美幸	日本	屋内
		三宅砂織	日本	屋内
		久野彩子	日本	屋内
		bacilli / 旧世界土協会	日本&シンガポール	屋内
		阿部海太郎	日本	屋内
		KIGI	日本	屋外
	●	坂 茂	日本	屋内
		浅葉克己	日本	屋外
	●	牛嶋 均	日本	屋外
	●	ファイグ・アフメッド	アゼルバイジャン	屋外
	●	奥村浩之	日本／メキシコ	屋外
●	アナ・ラウラ・アラエズ	スペイン[バスク地方]	屋外	
日置	●	弓指寛治	日本	屋外
	●	アレクサンドル・ポノマリョフ	旧ソ連[ドニプロ]／ロシア	屋外
	●	リチャード・ディーコン	イギリス	屋外
	●	さわひらき	日本／イギリス	屋内
	●	小野龍一	日本	屋外
三崎		カールステン・ニコライ	ドイツ	屋内
	●	杉谷一考	日本	屋外
	●	梅田哲也	日本	屋内
	●	植松奎二	日本	屋内
		山本 基	日本	屋内
蛸島	●	ラグジュアリー・ロジコ[豪華朗機工]	台湾	屋外
		リュウ・ジャンファ[劉建華]	中国	屋外
	●	OBI	日本	屋内
	●	田中信行	日本	屋内
		トビアス・レーベルガー	ドイツ	屋外

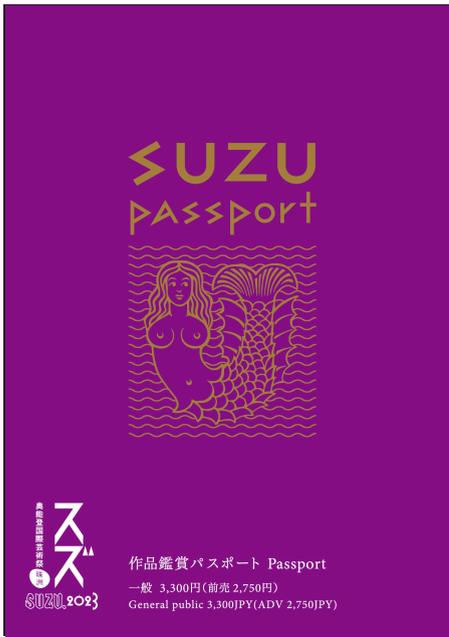
## 参加アーティスト（2023年5月末時点）

エリア	新作	アーティスト名	出身地域／活動地域	展示
正院		大岩オスカー	ブラジル／アメリカ	屋外
	●	ひびのこづえ	日本	屋内
		中島伽耶子	日本	屋内
直	●	佐藤悠	日本	屋外
飯田	●	ソル・カレロ	ベネズエラ／ドイツ	屋内
	●	弓指寛治	日本	屋内
	●	栗田宏一	日本	屋内
	●	のらもじ発見プロジェクト	日本	屋内
		河口龍夫	日本	屋内
上戸	●	吉野央子	日本	屋内
	●	城保奈美	日本	屋内
		ラックス・メディア・コレクティブ	インド	屋外
	●	N.S.ハーシャ	インド	屋外
	●	SIDE CORE	日本	屋外
宝立	●	シリン・アベディニラッド	イラン／アメリカ	屋内
	●	コウ・シュンミン[高凌明]	オーストラリア／香港	屋内
	●	北山善夫	日本	屋内
	●	シュー・ジェン[徐震]	中国	屋外
	●	マリア・フェルナンダ・カルドーズ	コロンビア／オーストラリア	屋内
若山	●	泰然+きみきみよ	日本	屋内
	●	嘉春佳	日本	屋内
	●	鈴木泰人	日本	屋内
	●	原嶋亮輔	日本	屋内
	●	小山真徳	日本	屋外
広域		アレクサンドル・コンスタンチーノフ	ロシア	屋外

## パフォーマンスアーツ（2023年5月末時点）

日程	アーティスト名	会場
9月22日(金) 9月23日(土) 9月24日(日)	田中 泯	スズ・シアター・ミュージアム
9月29日(金) 9月30日(土)	さいはての朗読劇 出演:常盤貴子 作:大崎清夏 構成:長塚圭史 音楽:阿部海太郎 企画:阿部海太郎、南条嘉毅	スズ・シアター・ミュージアム
10月7日(土) 10月8日(日)	劇団三毛猫座+熊田悠夢	鉢ヶ崎海岸
10月7日(土) 10月8日(日) 10月9日(月) 10月14日(土) 10月15日(日)	ひびのこづえ	スズズカ
10月14日(土) 10月15日(日)	世田谷シルク	木ノ浦野営場
10月21日(土)	小野龍一	狼煙漁港

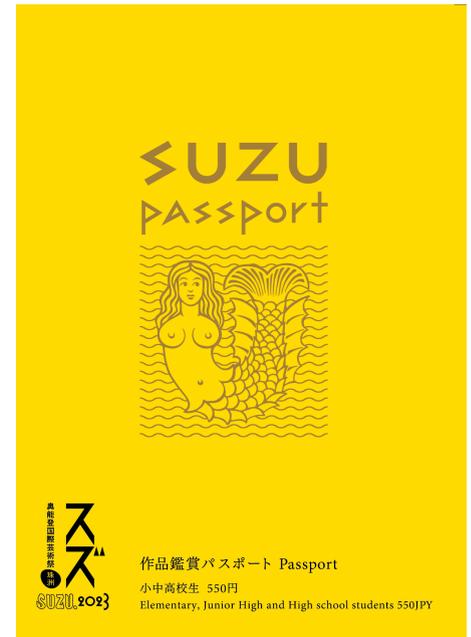
## チケット情報



一般



大学生



小中高校生

奥能登国際芸術祭の作品を鑑賞するには、芸術祭の会期中すべての作品を1回ずつ鑑賞できる（イベント除く）作品鑑賞パスポートか、作品会場（主に屋内作品）ごとに個別鑑賞券を購入する必要があります。

### ◆作品鑑賞パスポート

#### 【料金】

[前売り] 一般：2,750円／大学生：1,320円／小中高生：550円

[当日] 一般：3,300円／大学生：1,650円／小中高生：550円

#### 【特典】

- ・スタンプを全て集めた方には、インフォメーションセンターにてコンプリート賞をプレゼントします。
- ・パスポート提示で、飲食店、宿泊施設などの割引が受けられます。

### ◆電子パスポート

作品鑑賞パスポートの電子版を販売します。専用のQRコードを各会場で読み取って入場するため、非接触形式の電子パスポートとしてご利用いただけます。

### ◆個別鑑賞券

#### 【料金】

一般・大学生：330円／小中高校生：220円

[スズ・シアター・ミュージアム] 一般：800円／大学生：600円／小中高生：400円

## オフィシャルツアー「すずアートバス」



全てのコースに現地ガイドが搭乗し、芸術祭情報はもちろんのこと、地域情報や作品制作秘話なども紹介します。全4コース（午前・午後、各2コース運行）を回れば、市の中心部である直・飯田エリア以外の作品が鑑賞できます。

発着：道の駅すずなり（野々江町 シの部 15）

### 【料金】

[各コースチケット] 一般：2,750 円／小中高生：1,100 円

[全コースに乗車できる通し券] 一般：7,700 円／小中高生：2,750 円

## 公式インフォメーションセンター

作品の案内のほか、奥能登国際芸術祭のグッズ販売も行います。

会場：ラポルトすず（飯田町 1-1-8） 時間：9：30-18：00（会期中無休）

会場：スズ・シアター・ミュージアム（大谷町 2-47） 時間：9：30-18：00（会期中無休）

## アクセス

### ◆飛行機／ふるさとタクシー

羽田ーのと里山空港 飛行機（約1時間） ⇒ のと里山空港ー珠洲 ふるさとタクシー（約45分）

※ふるさとタクシーは、のと里山空港出発の乗り合いタクシーです。

前日 17:00 までの予約が必要です。

電話での申込はスズ交通（0768-82-1221 年中無休／24 時間対応）まで。

### ◆JR・特急バス

東京ー金沢 新幹線（約2時間30分）

名古屋ー金沢 特急（約3時間30分） ⇒ 金沢ー珠洲 特急バス（約3時間）

大阪ー金沢 特急（約3時間）

### ◆車

東京ー金沢 関越・北陸自動車道経由（約6時間）

名古屋ー金沢 東海北陸・北陸自動車道経由（約3時間30分） ⇒ 金沢ー珠洲 のと里山海道経由（約2時間20分）

大阪ー金沢 名神・北陸自動車道経由（約3時間30分）

# 奥能登国際芸術祭 2023

作品プラン

## 大谷エリア



©JASPAR,Tokyo,2023 and Chiharu Shiota Photo : Kichiro Okamura

### 塩田千春 〈日本／ドイツ〉 「時を運ぶ船」

日本で唯一、古代から連綿と続く珠洲の揚げ浜式製塩は、これまで何度か消滅の危機に瀕してきた。塩田に敷きつめる良質な砂を運ぶのに使われた砂取舟から空間いっぱいに赤い糸を張り巡らせ、塩づくりの技術を今に守り伝えてきた人びとの歴史と記憶を紡ぐ。

#### －プロフィール

1972年大阪府生まれ。ベルリン在住。生と死という人間の根源的な問題に向き合い、立体、写真、映像など多様な手法を用いた作品を制作。



Photo : Keizo Kioku

### スズ・シアター・ミュージアム

スズ・シアター・ミュージアムは、かつての珠洲市立西部小学校の体育館を全面的に改修し、珠洲の文化の保存と活用の拠点として、2021年9月より新たな歩みを始めることになりました。

珠洲市内の家々に眠っていた生活用具の数々を一堂に集め、民俗・人類学的視点から展示紹介するとともに、気鋭のアーティストたちがそれらの生活用具に新たな命を吹き込み、土地の物語の表現へと結晶化させています。各々の作品の中で解釈され、意味づけられることで、生活用具は以前とは異なる命を得ることになりました。



Photo : Keizo Kioku

### 南条嘉毅 〈日本〉 「余光の海」

珠洲の古代の地層から掘り出した砂を敷き詰め、木造船、古いピアノなどを据えて映像を照射する。時代と状況が変化してもずっと変わらない景色や思いを手掛かりに、土や古いモノがはらむ記憶の残照を浮かびあがらせる。

#### －プロフィール

1977年香川県出身。2002年に東京造形大学研究科を修了。2016年和歌山へ移住。2016年以降、土、砂を主要な材料とし、音と光を加えノスタルジックな空間を通した劇場型のインスタレーション作品として表現方法を確立。



Photo : Keizo Kioku

### OBI 〈日本〉 「ドリフターズ」

大蔵ざらえでは、珠洲の風習「ヨバレ」で使われてきた赤御膳など、大量の生活民具が収集された。時代を越えてスズ・シアター・ミュージアムに流れ着いたドリフターズ（漂着物）たちが一堂に会する。

#### －プロフィール

鈴木泰人（美術作家）、本間智美（建築家）、水野祐介（映像作家）によって組織されたアートユニット。フィールドワークを通して身近な環境における不透明な存在や素材にスポットを当てて、文化と社会を結ぶ芸術活動を行う。



Photo : Keizo Kioku

大川友希 <日本>  
「待ち合わせの森」

珠洲の祭りにふれた作家は、祭りとは人々が会いたい人に会える約束の場所であると考えた。役目を終えたキリコと古着を裂いて結びなおした紐を用いて、数多の記憶で埋め尽くされた約束の場所をつくる。

-プロフィール

2012年愛知県立芸術大学 / 彫刻専攻卒業。  
物に残る記憶や時間、思い出の断片を掘り下げ、繋げて、新たな時間のかたちとして再構成した立体作品やインスタレーション作品を制作。



Photo : Keizo Kioku

橋本雅也 <日本>  
「母音／海鳴り」「海雲」

瓦産業や珠洲焼、珪藻土など、珠洲では歴史が土と共にあることに注目し、粘土に触れた時に覚えた深い懐かしさ、海や呼吸、胸を打つ鼓動、波の揺らぎ、波に洗われた小石や星々などの繋がりを探りながら展開する。

-プロフィール

彫刻家 1978年岐阜県生まれ。手を加えることで自然物が内包していたものが表出してくる現象に興味を抱き、独学で創作活動を始める。近年、鹿の角、骨を素材とし、身近にある草花をモチーフとした作品で注目を集める。



Photo : Keizo Kioku

竹中美幸 <日本>  
「覗いて、眺めて、」

ある人物の日記越しに覗いた珠洲の現在と過去。どことも知れず漂う物語を半透明なガラス小屋の中に作る。SNSやブログとは異なる、ささやかな日記に綴られていたリアルな生活。本来なら書き手だけが唯一の読者である記録に介入し、日常を掬いあげる試み。

-プロフィール

岐阜県生まれ。多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業後、同大学大学院美術研究科修了。光や影を取り込んだ平面作品やインスタレーションに展開。



Photo : Keizo Kioku

三宅砂織 <日本>  
「The missing shade 59-1」「Seascape (Suzu)」 「Untitled」

大蔵ざらえをした家の舟小屋に眠っていた木造船の部材と写真を起点に、珠洲の海と船のイメージをめぐる作品。船の古材を配した空間に、過去と現在を見渡すかのような海景や塩の結晶の映像と、フォトグラムを組み合わせたインスタレーションを展開。

-プロフィール

2003年ごろより、透明シートに複数のドローイングを描き、印画紙の上に重ね合わせて露光し、ドローイングの影を現像するというフォトグラムの制作を開始。



Photo : Keizo Kioku

久野彩子〈日本〉  
「静かに佇む」

朽ちた農機具や使い古された農具の欠けや割れ目に、かつて北前船の寄港地として栄えた街の風景に見立てられた、細密な金属の造形物を接着する。少しずつ変化しながら堆積し、受け継がれてきた街の歴史や過去の姿を重ね合わせ、まだ見ぬ新たな風景を現出させる。

-プロフィール

1983年東京都生まれ。2008年武蔵野美術大学工芸工業デザイン科金工専攻卒業、2010年東京芸術大学大学院美術研究科工芸専攻（鑄金）修士課程修了。現在東京在住。



Photo : Keizo Kioku

bacilli / 旧世界土協会〈日本 & シンガポール〉  
「Soilstory - つちがたり -」

土の記憶にまつわる地元の人たちとの対話をもとに、大蔵ざらえで得た「モノ・証拠」を素材として展開する。パンデミックで生じた人の距離感を念頭に、共に有する願いを物語りとして、未来の社会のあり方を問う。

-プロフィール

南条 嘉毅・James Jack・吉野 祥太郎によるアーティストコレクティブであり、特徴ある地質や歴史に焦点を当て世界各地を調査して周り、作品を制作し活動している研究機関です。



Photo : Keizo Kioku

阿部海太郎〈日本〉

「光の方舟」の音楽は、阿部海太郎が手がける。作家は、「大蔵ざらえ」で各家庭から集まったたくさんの民具、風波、民謡、祭囃子など、珠洲に暮らす人々のあらゆる風土と営みから音を収集し、それらが音風景となって珠洲という土地に新しい眼差しを向ける作品となった。

-プロフィール

クラシック音楽など伝統的な器楽の様式に着目しながら、楽器の今日的な表現を追求し、舞台、映画、テレビドラマなどの楽曲、演奏会企画やアルバム制作などを通して、独特な音楽世界を展開している。



Photo : Kichiro Okamura

KIGI〈日本〉

スズ・シアター・ミュージアムのロゴやグッズのデザインを手がける KIGI。今回のロゴデザインのコンセプトには、珠洲の三方を見渡す海の灯台のような存在でありたいと考え、ミュージアムの作品のイメージから、光の動きを意識しながら線を走らせるようなロゴが完成した。

-プロフィール

2012年に植原亮輔と渡邊良重により設立。以来、企業やブランドのアートディレクションのほか、アート作品も発表するなど、自在な発送と表現力であらゆるジャンルを横断しながら、クリエイティションの新しいあり方を探し、活動している。



※イメージ画像

坂 茂〈日本〉  
「レストラン・ショップ」

世界中で大規模な建築を設計する一方、災害やパンデミックに対する支援として紙管を構造体に使った仮設住居などを各地で提案している作家。今回は杉の木を圧縮し、鉄骨のような形状をした構造体を主軸にしたスズ・シアター・ミュージアムのレストラン・ショップを建築設計した。

-プロフィール

1957年東京都生まれ。慶應義塾大学環境情報学部教授。2014年にプリツカー建築賞を、2017年に紫綬褒章を受賞。



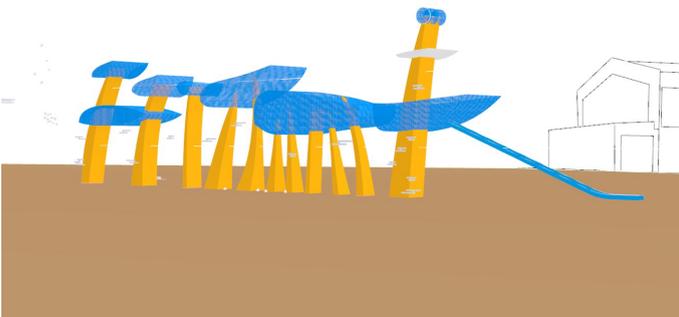
Photo : Kichiro Okamura

浅葉克己〈日本〉  
「石の卓球台第3号」

奥能登国際芸術祭のクリエイティブディレクターを務める作家は、卓球の名手としても名高い。卓球をコミュニケーションを活発にする絶好のツールと考える作家は、これまでも一枚の石からつくった卓球台をデザインして各地で展開してきた。

-プロフィール

1940年神奈川県生まれ。桑沢デザイン研究所、ライトパブリシティを経て、1975年浅葉克己デザイン室を設立。



※イメージ画像

牛嶋 均〈日本〉  
「松雲海風舂雲」

強い海風に耐えしっかりと根を生やし、美しい立ち姿を見せている。強い風によって伸びた枝葉、雲のようで船のよう。船ではなく舂、大地と繋がっている。広大なスズ・シアター・ミュージアムのグラウンドに子どもが遊ぶことができる作品。

-プロフィール

1963年福岡県生まれ。1980年代、田中泯に師事。その後、身体パフォーマーとして主にヨーロッパ・アメリカ等で活動。帰国後、家業の遊具製作所を手伝いながら自ら遊具を彫刻と呼ぶ作品を発表している。



撮影：平間至

《村のドン・キホーテ》(東京) 2020年

田中 泯〈日本〉  
「場踊り」

「場踊り」とは、「踊りの起源」への絶え間ない調査と堅固なこだわりを追求する田中泯が、日常に存在するあらゆる場で固有の踊りを即興で踊るという実践的アプローチである。

踊り = 田中泯、音 = 石原淋

-プロフィール

1974年独自の舞踊活動を開始。1978年海外デビュー。1985年山村へ移住、農業を礎とし活動を継続。国内外でのダンス公演は現在までに3000回を超える。



さいはての朗読劇  
「うつつ・ふる・すず」

詩人の大崎清夏が珠洲の暮らしを採話し、新たな物語を書き下ろし朗読劇を行う。前回行った地元の民話、昔話などのリサーチに加え、いまを生きる人からの聞き書きを通じて、新たな珠洲の民話を見出す。演出は、昨年『珠洲の夜の夢』で地元の出演者と共に、スズ・シアター・ミュージアムを文字通り「劇場」空間へと導いた長塚圭史。物語を彩る音楽にはミュージアム内で上映される「余光の海」の音楽を担当した阿部海太郎。朗読には、朝の連続テレビ小説『まれ』への出演をきっかけに、珠洲の人々と長く交流を深めてきた常盤貴子を迎える。



※イメージ画像

ファイグ・アフメッド〈アゼルバイジャン〉  
「自身への扉」

この作品は日本の神道や禅の修行における、「門」の神聖で比喩的な意味に基づいています。作品は日の出と日の入りの間に立ち、それは人生の両側面です。門をくぐると、風の音と門の表面の波が起こります。この作品には鑑賞者自身が通過することで、禅の時を挙げる儀式そのものも含まれています。それは、あなた自身が門であるのです。

－プロフィール

アゼルバイジャン・バクー出身。2017年のヴェネツィア・ビエンナーレにはアゼルバイジャンの代表として参加。



※イメージ画像

奥村浩之〈日本／メキシコ〉  
「風と波」

作家の石彫を特徴づける「割戻し」による、白く輝く石素材の持つテクスチャーと、うねった形の表現は、陽光の当たり方や、手と目で感じる触感から、時には優しく、時には荒々しい、珠洲の波や風の表情にシンクロする。

－プロフィール

1963年石川県金沢市生まれ。1988年金沢美術工芸大学大学院修士課程修了。1989年にメキシコ古代文明とラテンアメリカ文化に興味を持ち渡墨し、メキシコを中心に作家活動している。



※イメージ画像

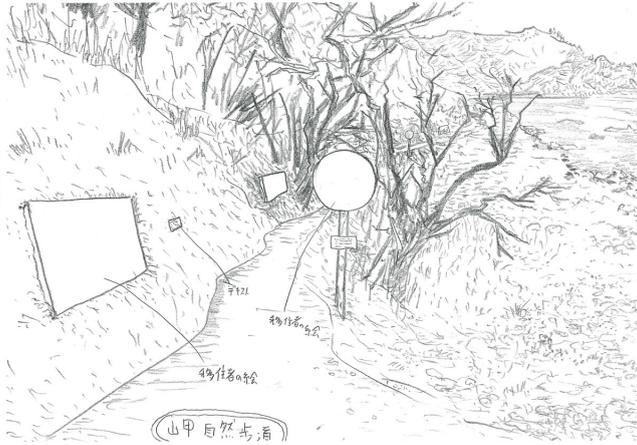
アナ・ラウラ・アラエズ〈スペイン [バスク地方]〉  
「太古の響き」

珠洲の独特な里山里海の風景を望める海岸から突き出た岩場の上が舞台。そこに人類の経験を反映したかのような「知恵の木」のような形をイメージした作家。過去からの力の根源となる木が別の未来を指し示し、あらゆる世代、若者たち、お年寄りが集まる場を作り上げる。

－プロフィール

スペインバスク地方のビルバオ出身。映像作品、雑誌のピクチャーエディター、インテリアデザイン、音楽プロジェクトなど多岐に渡る。

## 日置エリア



※イメージ画像



※イメージ画像

### 弓指寛治〈日本〉 「プレイス・ビヨンド」

木ノ浦岬自然歩道のコースの一部に、珠洲に移り住んだ人たちのものがたりと、かつて珠洲から満州へと渡った開拓団のものがたりを絵にし、数点設置する。作家自ら珠洲に移り住んだ人たちや満蒙開拓団のご遺族を訪ね、話を伺い、移り住むとは何かを問う作品を制作する。

－プロフィール

1986年三重県生まれ。「自死」や「慰霊」をテーマに創作を続ける。母親の自死がきっかけに浮かんだモチーフが、彼の表現の核となっている。

### アレクサンドル・ポノマリョフ〈旧ソ連[ドニプロ]／ロシア〉 「TENGAJ」

古いパーゴラ（東屋の支柱）のある場所に、地元の酒造で使われなくなった酒タンクを利用し、帆柱、帆桁、帆綱を駆使して船がモチーフのインスタレーションを制作する。風が吹くことによって帆綱の一部が振動し、酒タンクが共鳴器となって風の音が鳴る機能も併せ持つ。

－プロフィール

1957年旧ソ連生まれ、モスクワ在住。オリョール美術学校卒業後、海に憧れて航海士となり、7つの海を旅する。1982年に美術界に戻り、海、船をテーマとする作品を展開。



撮影：大倉英揮《赤い鳥の居る風景》@座・高円寺（東京）、2014年

### 世田谷シルク〈日本〉 「おくのとのきおく」

作・演出・振付の堀川が奥能登を数日かけて調査し、現地の特徴と魅力をテーマに、自然音や人の棲む生活音、出来事や昔話など人の声を集める。そしてそれらを表現化し、奥能登の自然の中で10名の俳優・ダンサーたちとパフォーマンスを行う。

－プロフィール

2007年立ち上げ。東京を拠点に「くすつと笑えるアート」を軸に、視覚芸術に重きをおきながら言葉と舞踊の作品を創作している。



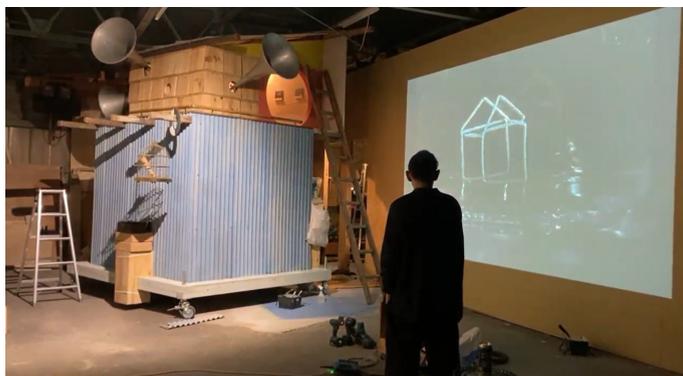
※イメージ画像

### リチャード・ディーコン〈イギリス〉 「Infinity 41.42.43」

本州から突き出した能登半島とその先端に位置する珠洲の特異性に関心を抱いた作家は、45度の角度で空からの光を集め反射する送受信機のような彫刻作品「Infinity」を木ノ浦海岸に3点設置する。「Infinity」は作家が制作しているシリーズ作品で、今作で41、42、43作目。

－プロフィール

1949年イギリス生まれ。イギリスを代表する作家で、1987年にターナー賞を、2017年にエルンスト・フランツ・フォゲルマン賞を受賞。



Q SO-KO(名古屋)

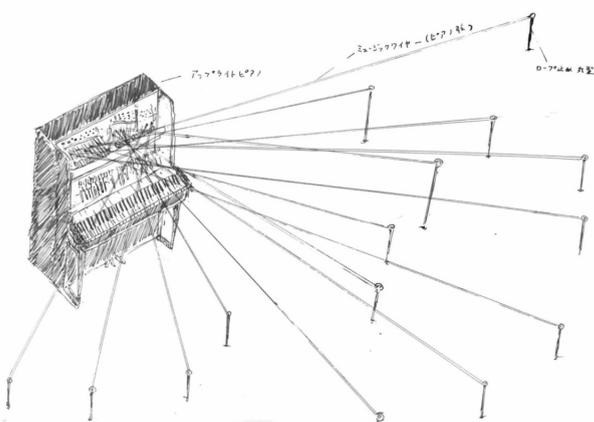
さわひらき 〈日本/イギリス〉  
「幻想考」

過去2回の展示で展開してきた『幻想考』を発展させ、“今”と“未来”における幻想の成立及び、この世界の確からしさの道標としての身体性を再獲得するきっかけとしての小屋から広がる異界を提示する。

-プロフィール

石川県生まれ。高校卒業後に渡英、現在はロンドンと金沢を拠点に制作をつづけている。近年は映像と展示空間とが互いの領域を交差するような作品に取り組み、世界各地で発表している。

アイオロスの広場 Aiolos Square (X-S)



※イメージ画像

小野龍一 〈日本〉  
「アイオロスの広場」

ピアノから空間へとナイロン糸を引き伸ばし、離れた場所で糸に「触れる」ことで演奏するこの作品は、一台のピアノで複数人のセッションを可能にする。作品は人同士、そして人と自然の「協奏」のための触媒となる。

-プロフィール

1994年東京都生まれ。東京藝術大学の作曲科を卒業後、同大学院美術研究科を修了。ジョン・ケージ美学の研究・実践を基に、音楽空間における人と音の関係性の「変奏」をコンセプトとした、領域横断的な活動を展開している。

## 三崎エリア



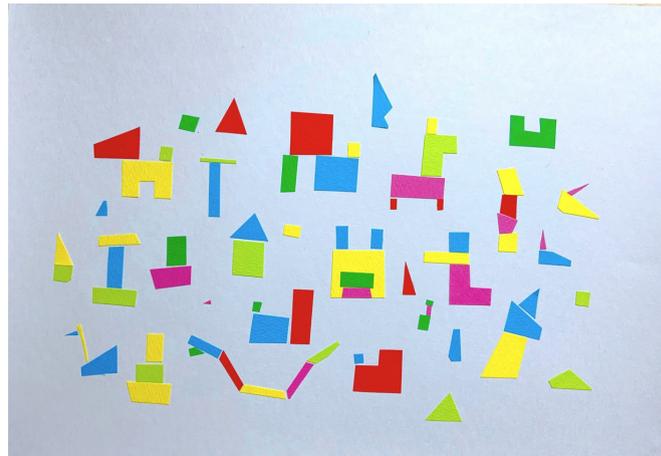
Photo: Kichiro Okamura

カールステン・ニコライ 〈ドイツ〉  
「Autonomo」 「図書室：カールステン・ニコライが推薦する子供の本」

会場は旧粟津保育所。遊戯室には大きな金属の円盤が吊られ、テニスボール送球機が置かれる。飛ばされたボールが円盤や壁に跳ね返る音で、偶然に音生まれる。

-プロフィール

1965年生まれ、ベルリンを拠点に活動。科学や数学に深い影響を受けながら、多様なジャンルのアートにある境界線をぼかすことを試みる。



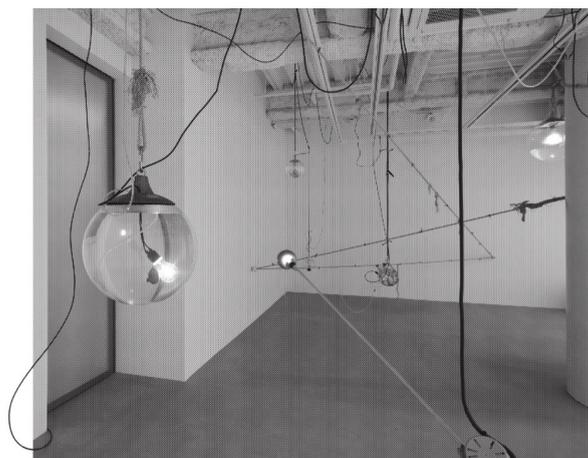
※イメージ画像

杉谷一考 〈日本〉  
「おもちゃ」

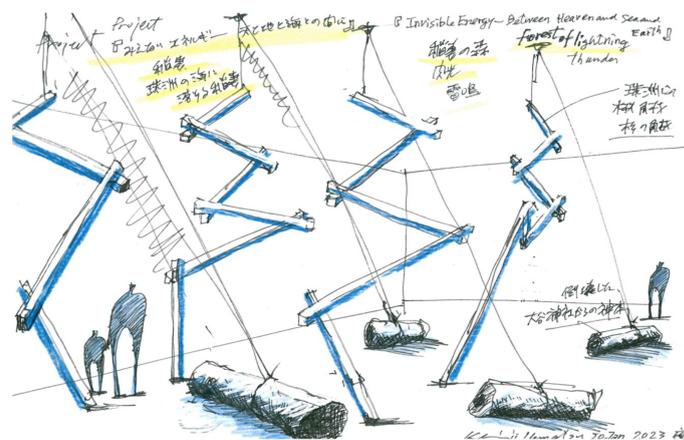
カラフルなオブジェを積み木遊びのように鑑賞者が自由に配置して構成する参加型のインスタレーションを展開する。作品が作者から手放され、誰かの手によって自由に広がり、形を変えながら変化し続け、いずれ消えてなくなってしまう作品。

-プロフィール

1985年滋賀県生まれ。広島市立大学芸術学部美術学科彫刻専攻 卒業後、同大学の博士課程を修了。ロサンゼルスや香港、韓国など、国内外で作品を発表している。



※イメージ画像



※イメージ画像

梅田哲也〈日本〉  
「遠のく」

空間の表と裏、手前と奥、遠くから聞こえる音にしか混ざらないざらざらした光、物と人とがときどき入れ子になって区別がつかなくなるようなところで、私と、うちから同行する頼もしい一度は不要とされたようなものたちが、かつて養蚕がおこなわれた工場と、付随する機能や資材、自立した桑の木、周囲の人に影響され、今を刻みながら染みになっていく過程をそのまま残していくことにします。

－プロフィール

美術館や博物館、オルタナティブな空間や屋外において、その場でしか成立しえない現象としての時間を演出する。

植松奎二〈日本〉  
「みえないエネルギー 天と地と海との間に」

11月半ばから12月に掛けて北陸では猛烈な風が吹き荒れ、雷が激しく鳴り響く日があり、この天候のことを石川や富山では「鯨おこし」と呼ぶ。長年珠洲の地に根をはったのちに倒木した御神木も組み込まれ、膨大な時空の重なりが体感されるインスタレーション。

－プロフィール

1947年兵庫県生まれ。1975年渡独。以後ヨーロッパ各地で展覧会を開き国際的に活躍。現在、箕面市とデュッセルドルフにスタジオを構え制作と発表を続けている。

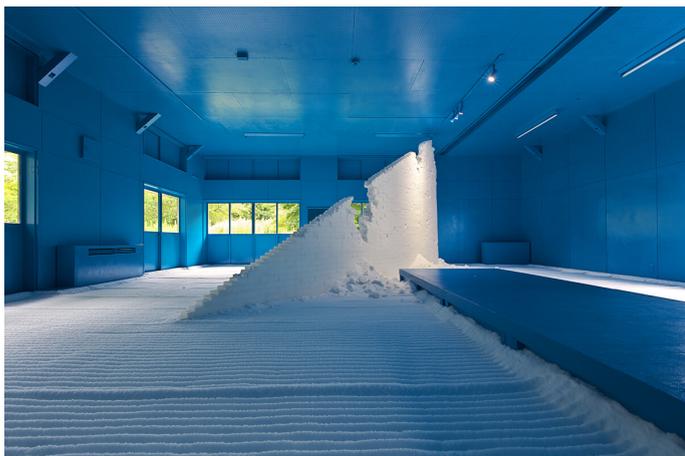


Photo : Kichiro Okamura

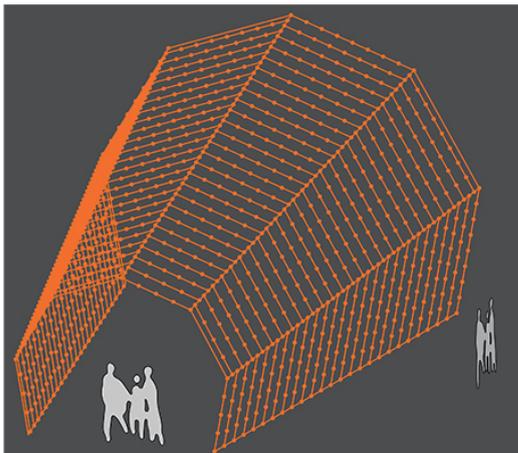
山本基〈日本〉  
「記憶への回廊」

時をさかのぼるようなトンネルに、これまでモチーフにしてきた「迷宮」が描かれ、その奥には「塩の塔」が築かれた部屋が広がる。保育所らしさの空間とドロイングエリアが共存し、かつての活気と静謐さが交わり合う。

－プロフィール

1966年広島県尾道市生まれ。1995年金沢美術工芸大学卒業。若くしてこの世を去った妻や妹との思い出を忘れないために長年「塩」を用いたインスタレーションを制作。

## 蛸島エリア



※イメージ画像

ラグジュアリー・ロジコ [豪華朗機工] 〈台湾〉

瓦を通して、「記憶」、「家」、「人口」、「産業」など、素材と地域問題の関連性をとりあげる作品。「集まることは力になる」をコンセプトにし、記憶を集めるエネルギーを「家」の象徴とする。

-プロフィール

現代アーティスト4名、Chih-Chien Chen, Kun-ying Lin, Keng-hau Chang, Geng-hwa Chang が、「ハイブリッド」をコンセプトに創立した Luxury Logico は、「愉快で奇妙な土地」をテーマにした明るい作風で知られている。



撮影：諏訪原早紀《アンドロイドは毒をも喰らう》

劇団三毛猫座+熊田悠夢 〈日本〉

「海のまぼろし」

劇団三毛猫座と、木彫作家の熊田悠夢のコラボレート作品。蜃気楼をモチーフに、海辺の街に集う3人の女性の心情の揺らぎを描く。

-プロフィール

劇団三毛猫座：演劇作品だけでなく、朗読劇や、詩的テキストを用いたパフォーマンス作品も発表。熊田悠夢：京都市立芸術大学大学院美術研究科漆工修了。木などを用いて作品制作を行う。

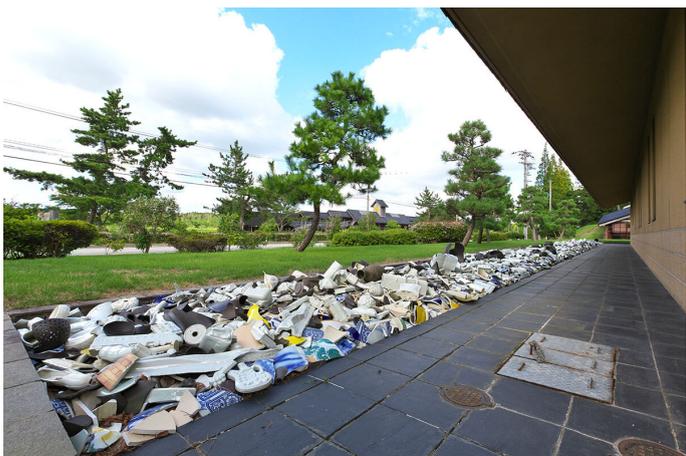


Photo: Kichiro Okamura

リュウ・ジャンファ [劉建華] 〈中国〉

「漂移する風景」

中国の第一の陶都・景德鎮の磁器と中世日本を代表する焼き物だった珠洲焼を混在させ、大陸との交流や文化のあり方を問う作品。2017年の第一回芸術祭では、海から流れ着いたかのように見附島近くの海岸に並べられ、現在は珠洲焼資料館に場所を移して恒久設置されている。

-プロフィール

1962年中国江西吉安市生まれ。陶磁器を用い、悠久の歴史を持ちながらも不安定な自国の経済や社会を反映した作品を制作。



※イメージ画像

OBI 〈日本〉

「4K」

かつて珠洲にあった「蛸島劇場」は、エンターテインメントとしての映画鑑賞だけでなく、ニュース映画、老若男女が集い情報交換する、まちの情報ステーションでもあった。旧番匠邸を映画館と見立て、4つの部屋を使い各映像テーマに基づいた体感型スクリーンを制作する。

-プロフィール

建築家(本間智美)と美術家(鈴木泰人)、映像家(水野祐介)の3人のアーティストユニット。芸術活動による文化資源の掘り起こし、継続的に地域を発展させていく。



※イメージ画像

田中信行〈日本〉  
「触生」

作家は漆から喚起される、器、触覚、皮膚、身体、血、生命、原初などのイメージを、乾漆技法を用いて制作する。縄文時代の遙か昔から漆が受け継がれている奥能登で作品を発表することは、そこに暮らしていた人々や場の記憶を呼び覚まし、鑑賞者に静かに働きかける漆の場を創る。

-プロフィール

1959年東京都生まれ。金沢市在住。東京藝術大学大学院美術研究科修了。漆の艶めかしい質感から喚起される皮膚感や皮膜性を生かした乾漆による立体作品を制作。



クレジット：エレン・エスコベド作「Coatl」【1980年メキシコ国立自治大学文化センターに恒久設置】を参照

Photo: Kichiro Okamura

トビアス・レーベルガー〈ドイツ〉  
「Something Else is Possible/ なにか他にできる」

道路で断ち切られた線路跡に設置され、色を変えながらうねるような空間。鑑賞者がなかを進み、行きついたところから双眼鏡を覗くと、のと鉄道の終点だった旧蛸島駅の先に、作家からのメッセージが見える。鉄道軌道跡から、かつての終着点とその風景の先にある未来を望む。

-プロフィール

1966年ドイツ エスリンゲン・アム・ネッカー生まれ。デザインの領域における戦略を使いながら、アートの意味やアート制作のこれからの可能性について考察する。

## 正院エリア



Photo : Kichiro Okamura

### 大岩オスカール 〈ブラジル／アメリカ〉 「植木鉢」

のと鉄道旧正院駅の線路跡地に据えられた巨大な植木鉢。植えられた植物は秋に色づくものが選ばれた。春は桜が美しいこの場所を、秋には紅葉狩りの名所とする試み。鉢の側面には作家が珠洲に関連した絵を描いた。

－プロフィール

物語性と社会風刺に満ちた世界観を、力強くキャンバスに表現する油絵画家。独特のユーモアと想像力で、サンパウロ、東京、ニューヨークと居を移しながら制作を続けている。



### ひびのこづえ 〈日本〉 「コスチューム × 身体 × スズズカ」

2023年は、より多くの方がパフォーマンスに参加できるよう、地域の方々に声をかけ、スズズカの庭に芝生を敷き詰め屋外舞台を作ります。スズズカが、コスチュームを媒介として、人と人、人と場所をつなぎ、常に変化を続け、日常的に集える場所となることを目指しています。

－プロフィール

静岡県生まれ 東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。  
コスチューム・アーティストとして広告、演劇、ダンス、バレエ、映画、テレビなどその発表の場は、多岐にわたる。



Photo : Kichiro Okamura

### 中島伽耶子 〈日本〉 「あかるい家」

日中は穴から太陽光を取りこんで室内の偽の電灯を光らせ、夜間は室内の照明の光が穴からもれだす。幾多の盛衰を重ねてきたさいはての地・珠洲で、生活の「豊かさ」とは何かを静かに考える場所。

－プロフィール

1990年京都出身。2013年、京都精華大学洋画コース修了。2015年、東京藝術大学美術研究科修士課程修了。水や光などを主な素材とし、場所との関わりを出発点に作品を制作。

## 直エリア



※イメージ画像

佐藤 悠〈日本〉

### 「おはなしや 語りと話のホーム」

道の駅すずなり旧珠洲駅ホームにて、語りと話をテーマにした展示とパフォーマンスを行う。元駅員・駅関係者、利用者などに旧珠洲駅の記憶に関するインタビューを実施し、会期中は、即興物語作りパフォーマンス「いちまいばなし」をホームにて来場者に向けて行う。

-プロフィール

一見何も無いところから、表現が紡ぎ出される現場を作っている。滞在制作、パフォーマンス、レクチャー、ワークショップ、鑑賞プログラムなど。

# 飯田エリア



※イメージ画像



※イメージ画像

ソル・カレロ 〈ベネズエラ／ドイツ〉

かつて商店だったところの壁面や床、柱、天井にペインティングを施し、賑わっていた息吹を吹き返させる作品。

-プロフィール

1982年ベネズエラ、カラカス生まれ、ベルリンに在住。世界各地で展示を行う他、ベルリンを拠点とするプロジェクトスペース キンダーフック&カラカスを実施している。

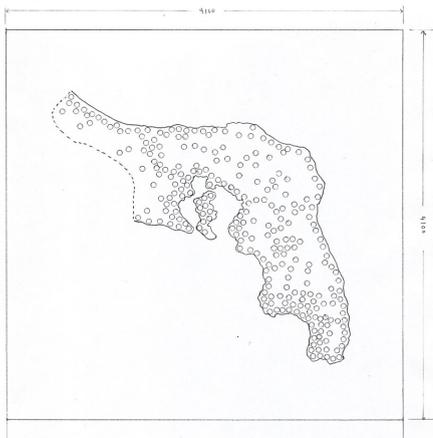
弓指寛治 〈日本〉

「物語るテーブルランナー in 珠洲 2」

地元住民から小さな物語を聞き取りし、それを基に作家が下絵を描き、地元住民がこれまでの裁縫技術を生かしてテーブルランナーを作り上げる。その人しか知らない、記憶、珠洲の景色が作家の絵と地元住民の裁縫によって、新しくも懐かしい記憶へと生まれ変わる。

-プロフィール

1986年三重県生まれ。「自死」や「慰霊」をテーマに創作を続ける。母親の自死がきっかけに浮かんだモチーフが、彼の表現の核となっている。



※イメージ画像

栗田宏一 〈日本〉

「能登はやさしや土までも」

かつてのタクシー会社営業所の2階で奥能登の土をテーマにした作品を展開する。珠洲の土がきっかけで作品を制作するようになった作家。すでに多くの土を採取しており、その色は虹色だと言う。各所で獲れた土を地図に落とし込み、奥能登、珠洲が持つ地中の色を浮かび上がらせる。

-プロフィール

1962年山梨県生まれ。1990年頃より足もとの土の美しさに着目し、日本列島全域での土採集を開始。2017年までに全市町村での採集を完了。



※イメージ画像

のらもじ発見プロジェクト 〈日本〉

「いいよ、いいまち、いいだまち。」

飯田エリアには個人的な文字を使った看板を掲げた商店がたくさんあります。この看板から書体を作り、これを使ったスタンプを制作します。専用のポストカードを持って、飯田エリアの商店街をめぐってスタンプを押していくと、思いがけない文章が完成するかもしれません。

-プロフィール

2013年より、下浜臨太郎、西村斉輝、若岡伸也らによる活動。古い町並みの看板に残る個人的な文字を「のらもじ」と名づけ、民藝的な魅力を積極的に見出す。



Photo : Kichiro Okamura

河口龍夫〈日本〉

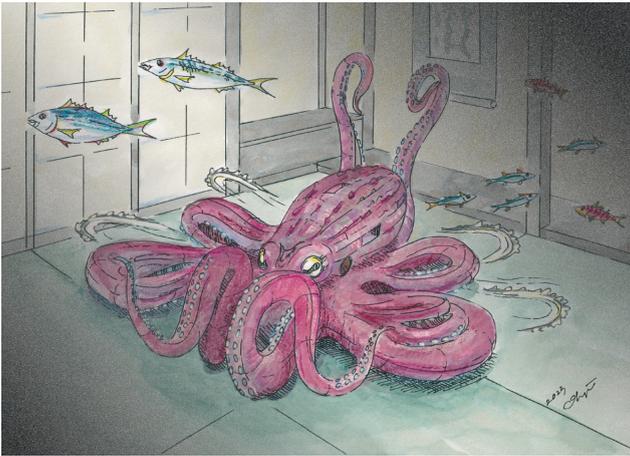
### 「小さい忘れもの美術館」

忘れられた鉄道、駅、プラットフォーム。作家は忘れられることの意味を問い、のと鉄道旧飯田駅を、どこの駅でも見られるような「忘れもの」で満たした。ホームに停車している貨物車の内部は黒板になっていて、鑑賞者はそこに未来への言葉を書き遺す。

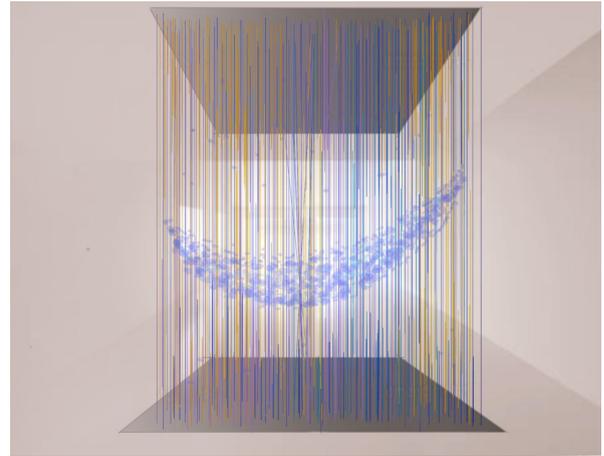
-プロフィール

1940年神戸生まれ。多摩美術大学卒業。1960年代から国内外で作品展開する日本を代表する現代美術作家の一人。「見えること」と「見えないこと」の「関係」を作品化。

## 上戸エリア



※イメージ画像



※イメージ画像

### 吉野央子〈日本〉 「回遊の果て」

作品の多くは海洋生物、魚の木彫作品。多種多様な魚類、海洋生物が一団となって回遊する。多くは食卓に上がる馴染みのある魚種、珠洲で水揚げされる魚種で、海流をイメージした複数の方向性、進行性を構成する。世界を巡る旅の最終目的地が今回の作品「回遊の果て」となる。

#### -プロフィール

1964年鹿児島生まれ。現在京都精華大学教授。木彫を中心としたインスタレーションを数多く発表。家畜や魚などの動物をモチーフとした寓話的な作品を発表している。

### 城 保奈美〈日本〉 「海の上の幻」

色とりどりの糸の重なりの中に舟のかたちが浮かび上がる。空っぽになった船小屋から臨む海と空の境目に、まるで幻のように珠洲の風景が現れる。

#### -プロフィール

1989年生まれ。富山県出身、東京都在住。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業。和菓子職人の祖父が作る繊細な色彩と形の菓みに魅せられ幼少期から美術を志す。近年は生来の優れた色彩感覚を活かし、レース糸を用いたインスタレーション作品の展示を行う。



Photo : Kichiro Okamura



Artist and Victoria

### ラックス・メディア・コレクティブ〈インド〉 「うつしみ」

のと鉄道旧上戸駅の駅舎のシルエットをなぞった骨組みだけの構造物を、駅舎の上部に角度を変えて重ねた。昼間は周囲の風景になじむその構造物は、夜になると重力から解放されたかのように青白く光り出す。それは駅舎の亡霊なのか、それとも未来の映像なのか。場所や物をもつ記憶、非物質的なものの存在を問いかける作品。

#### -プロフィール

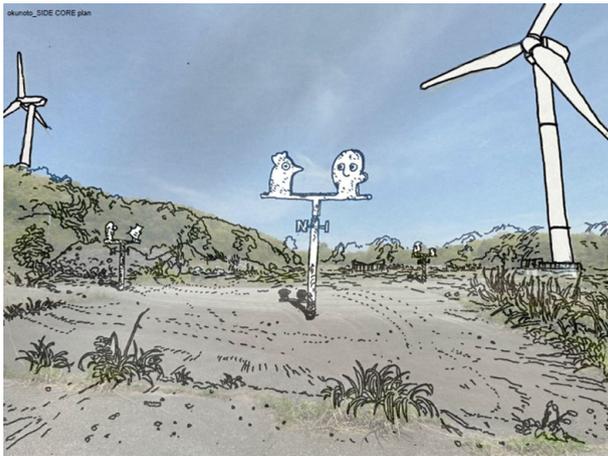
1992年に Jeebesh Bagchi、Monica Narula、Shuddhabrata Sengupta により設立、ニューデリーを拠点に活動。

### N.S. ハーシャ〈インド〉 「なぜここにいるのだろう」

どこかの海岸へと辿り着く漂着ゴミと、インドの動物園で起きたキリンの交換プログラムの出来事とを重ねた作家。故郷や地域性がなくなってきている現代に、「迷子のキリン」の親子を制作する。

#### -プロフィール

1969年インド マイソール生まれ。2008年にはアルテス・ムンディ賞を受賞。アメリカ、ロンドンなど世界各地で個展やグループ展に参加。日本では森美術館、メゾンエルメス東京などに参加経験がある。



※イメージ画像

SIDE CORE 〈日本〉  
「Blowin' In The Wind」

本作は風力発電所に実際に訪れて鑑賞するインスタレーション作品で、土木やインフラをめぐる「空間や時間のスケール感」を体験し、居住区的生活圏から想像できない「もう一つの珠洲」を模索する試み。

-プロフィール

2012年に高須咲恵と松下徹により活動を開始し、2017年より西広太志が参加。「風景にノイズを起こす」をテーマに、ストリート・カルチャーの視点から公共空間を舞台にしたプロジェクトを展開。

## 宝立エリア



シリン・アベディニラッド〈イラン／アメリカ〉  
「流転」

海岸に落ちているシーグラスに目を付けた作家。漁網を蔵の天井に張り、その上にシーグラスや日本酒の酒瓶を散らす。そこに光を当て、まるでシャンデリアのように輝く空間を制作する。

-プロフィール

イラン出身、米国を拠点に活動している。作品は彫刻、インスタレーション、映像など多岐にわたる。ヴェネツィア・ビエンナーレなど、国際的な舞台で作品を展示している。



コ  
「秘境」

地元住民から聞き取り調査を行い、観光ガイドブックには載っていない地元住民しか知らない風景や記憶を写真やスケッチで捉え、ホーム上に列車をモチーフにした構造物に、距離に応じて大小を変えて展示。駅舎では、聞き取った風景や記憶を電車の切符に見立てて展示する。

-プロフィール

1992年シドニー生まれ。香港を拠点に活動している。建築家であり、デザイン、インスタレーションと多岐にわたる。



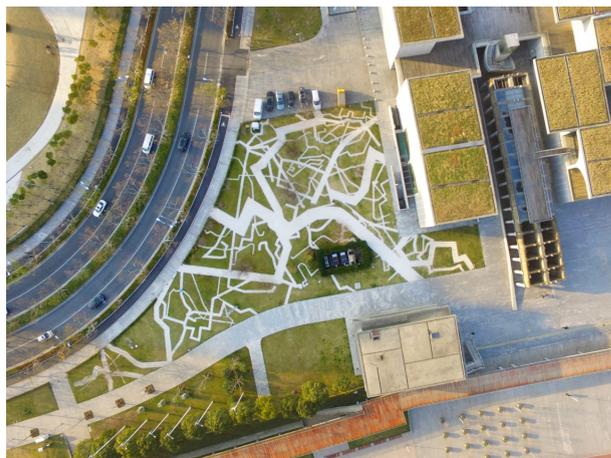
※イメージ画像

北山善夫〈日本〉  
「人間は赤ちゃんから生まれる」

古代エジプトでは墓の埋蔵品の中に幼児が遊ぶ手押し車も含まれ、これは墓の主人が生まれ変わるとき、もう一度赤ちゃんから生涯をスタートさせることを意味する。今作品は、人が赤ちゃんからその生を始めることをテーマとし、この世界、宇宙、歴史の事象を考える。

-プロフィール

1948年滋賀県生まれ。1970年代から紙や石を使った作品を作り始め、1982年には第40回ヴェネツィア・ビエンナーレの日本館に作品を発表した。



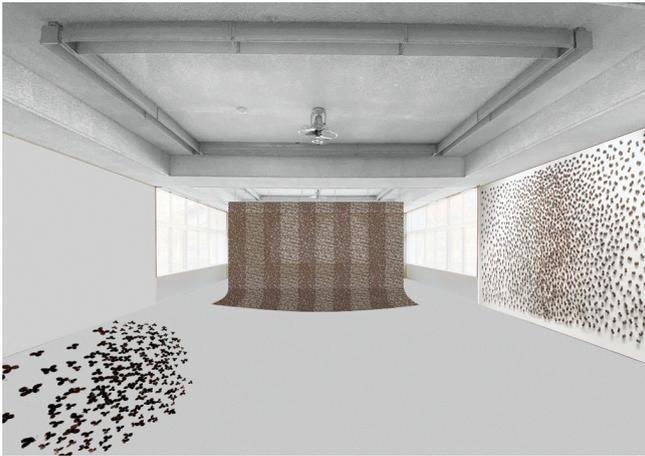
2015年 上海ドラゴン美術館

シュー・ジェン [徐震]〈中国〉  
「運動場」

作品は白い砂利石と植物を利用し、歩く道が交差するガーデンを作る。表面上の平和、実用的、美しいという見え方には隠された現実の歴史がある。作品に隠された意味を白い道を歩きながら考えさせる作品。

-プロフィール

1977年上海生まれ。上海を拠点に活動。中国の現代アート界を象徴するアーティストとして知られる。インスタレーション、ビデオ、絵画、パフォーマンスなど様々な分野で活躍中。



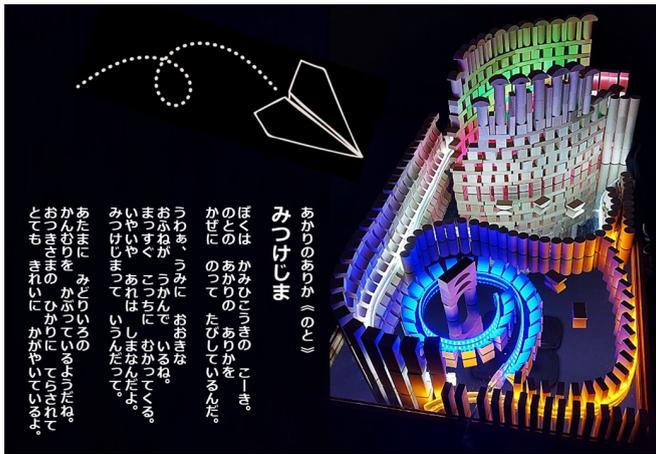
※イメージ画像

マリア・フェルナンダ・カルドーズ  
〈コロンビア／オーストラリア〉  
「種のタイムカプセル」

地元住民の協力の下、植物を収集し、珠洲に自生する椿や、菱の実、松ぼっくりを素材にして、作品へと変える。  
-プロフィール

1963年コロンビア・ボゴタ生まれ。シドニーを拠点に活動している。自然、芸術、科学、テクノロジーを融合させ、従来にない素材に対し畏敬の念を抱かせる作品を制作している。

# 若山エリア



※イメージ画像



※イメージ画像

## 泰然+きみきみよ 〈日本〉 「あかりのありか《のと》」

童話作家のきみきみよが書いた、あかりの行事や光に関係する現象を目撃しながら紙飛行機の「こーき」が能登を旅する童話。積み木と光によって、子どもたちの造形教育の研究を重ねる泰然が、珠洲の子どもたちと一緒に作り上げ、「あかり」の美しさを探求し、その感動を見る者へと伝える、コミュニケーション活動でもある。

-プロフィール

泰然：造形作家。長崎県出身、九州大学大学院修了。  
きみきみよ：童話作家。福岡県出身、福岡大学卒業。

## 嘉 春佳 〈日本〉 「祈りのかたち」

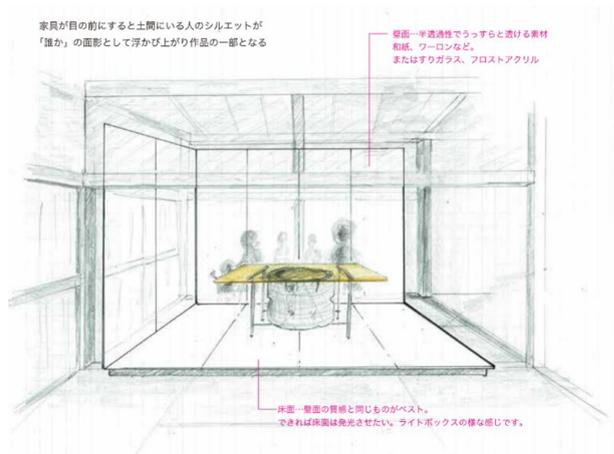
珠洲は、船という「器-うつわ」に乗って海からやってきた文化や技術を受け入れ、人々は儀礼において、大漁豊作の祈りや感謝をご馳走を詰めた器に託してきた。人々の生活の痕跡を残す古着を用いて、器をモチーフとして、人が土地で暮らすということについて考える。

-プロフィール

1996年茨城県生まれ。筑波大学芸術専門学群総合造形領域卒業。東京藝術大学先端芸術表現科修了。記録に残らず消えていく時間や記憶を主に古着を用いて形にする。



※イメージ画像



※イメージ画像

## 鈴木泰人 〈日本〉 「音蔵庫」

珠洲の多様な風景にマイクを向け、光と結びつけられこの「音蔵庫」に収められる。古くから人の流れを受け入れてきた珠洲の新たな風景を、大蔵ざらえで集められた民具や旧上黒丸小中学校に残された物たちに乗せて、語り聞かせてくれるサウンドインスタレーション。

-プロフィール

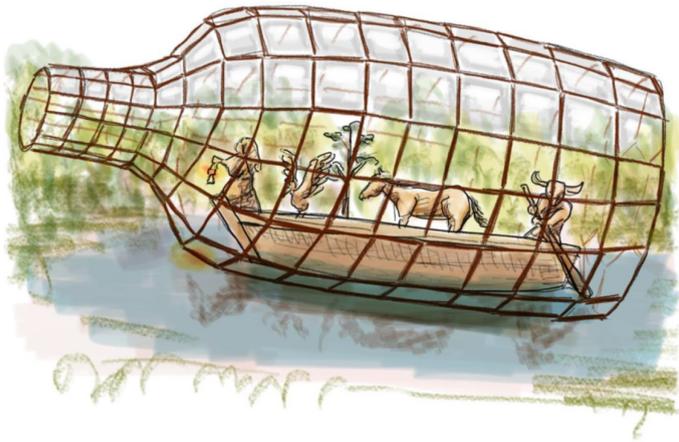
1979年神奈川県生まれ。多摩美術大学大学院美術研究科修了。光や音、そして場所を題材にし、絵画から、パフォーマンスアートなど多様な表現方法により発表を行う。

## 原嶋亮輔 〈日本〉 「Future Past」

吉ヶ池の人々との交流を通して出会う寂れ朽ちた道具たち。人が作り、人に使われた、営みに寄り添った痕跡。長い時を経た道具には魂が宿り変化（へんげ）するという「付喪神信仰」になぞらへ、それらの古い道具に手足が生えるごとくフレームをしつらえた家具へと変容させる。

-プロフィール

1980年生まれ。家具デザイナー/アーティスト。金沢を拠点に、2018年より古民具や伝統工芸がもつ時間性と変容をテーマにした家具シリーズ STILLIFE の制作を開始。



小山真徳〈日本〉  
「ボトルシップ」

マムシの入った酒瓶が漂着しているのを発見し、栗津集落から高波集落までの海岸に動物の骨が流れ着き野晒しになっていたことから、この場所が動物たちの遺骸が寄り集まってくる場所と考え、風葬地に流れ寄ってくる動物たちの遺骸を慰め、あるいは救済するような作品にする。

-プロフィール

1981年愛知県生まれ。旅人の視点を軸に制作している。「よそ者」として訪れ、生活者が普段見出すことのない置き去りにされたものたちに、深い共感を寄せる。

## 広域エリア



Photo : Kichiro Okamura

アレクサンドル・コンスタンチーノフ〈ロシア〉  
「珠洲海道五十三次」

珠洲の風景の特徴のひとつである屋根つきのバス停。数学者でもある作家は、4カ所のバス停を垂直平行を基本構造とするアルミニウムのパイプで包みこみ、作品化した。立地に応じて異なるテーマでデザインされた造形は、周囲の風景と呼応してさまざまな表情を見せる。

-プロフィール

1953年モスクワ生まれ。作家、建築家、数学博士。古い家屋を様々な素材で「包みこみ」、その場所に新しい意味を与え、再生することをテーマとする連作がある。

【お問い合わせ】

奥能登国際芸術祭実行委員会事務局（〒927-1214 石川県珠洲市飯田町 13-120-1）

TEL: 0768-82-7720 FAX: 0768-82-7727 E-mail: [info@oku-noto.jp](mailto:info@oku-noto.jp)